

「福島取り組みと支援のこれから」

～地域で支えていくために必要なこと～

病院の概要

名称：あづま脳神経外科病院 病床数：168床

急性期病棟	37床
地域包括ケア病棟	23床
回復期リハビリ病棟	60床
特殊疾患病棟	48床



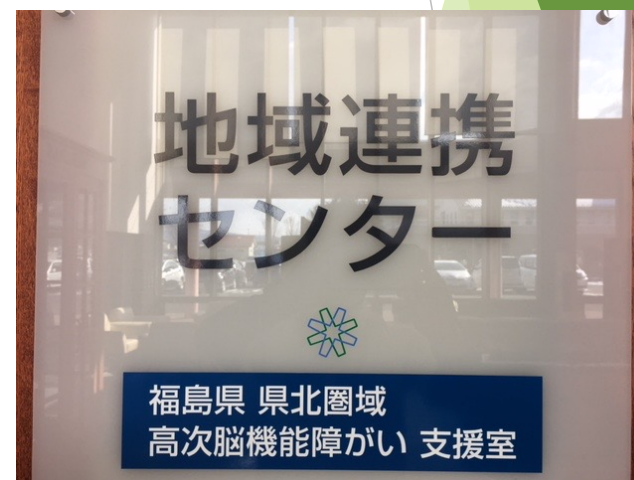
- ◇脳神経外科・循環器科疾患・リハビリテーションの治療
- ◇急性期から回復期・慢性期・在宅・福祉に至るまで切れ目のないサービスを提供

福島県高次脳機能機能障がい支援室 県北圏域

2017年に委託事業開始

3名のコーディネーター（社会福祉士、言語聴覚士）を配置

- ・相談支援事業
- ・支援体制整備
- ・普及啓発事業
- ・患者家族サロン開催



高次脳機能障がいの支援の難しさ

①理解しにくい症状

- ・記憶障害？・注意障害？
 - ・遂行機能障害？構成障害？
 - ・二次的症狀
- 複雑性

②長期的な回復・個別性

- ・回復段階は？
 - ・受容段階は？
- マニュアルがない

③支援制度の課題

- ・複雑な制度や利用の限度
- 連携や役割分担の重要性

④本人を取り囲む周囲の理解不足

- ・支援者、職場、地域住民などの認知度の低さ

高次脳機能障がい支援に関する事業の経緯

2001年度～2005年度	2006年度～2012年度 障がい者自立支援法	2013年度～ 障がい者総合支援法
高次脳機能障がい支援 モデル事業	高次脳機能障がい支援 普及事業	高次脳機能障がい及びその 関連障がいに対する支援普及事業
○国立障害者リハビリテーションセンターと全国12地域において、高次脳機能障がいの原因、症状、訓練状況、地域生活における支援等の状況を調査した。 ○支援のための枠組作り、診断基準、訓練プログラム、社会復帰・生活・介護支援プログラムを作成した。 ○これらを活用し、機能回復訓練、社会復帰・生活・介護支援について、サービスを試行的に提供した。 ○全国に普及可能な支援体制・手法を提示した。	○障がい者自立支援法に基づく地域生活支援事業として、都道府県が行う専門的な相談支援事業として、「高次脳機能障がい支援普及事業」を開始した。 2010年全都道府県 に支援拠点機関設置	○2013年度より 「高次脳機能障がい及び その関連障がいに対する 支援普及事業」と名称を 変更した。 支援拠点機関数 全国で123カ所 (2024年4月1日時点)

福島県高次脳機能障がい支援体制の構築

課題

支援ネットワーク会議を発足させ、身近な相談窓口の必要性を家族会・支援室・県が協働して普及したことで各圏域の医療機関に支援拠点が開設できた。今後は、地域の掘り起しと各圏域に応じたきめ細かい支援体制を充実させていく必要がある。

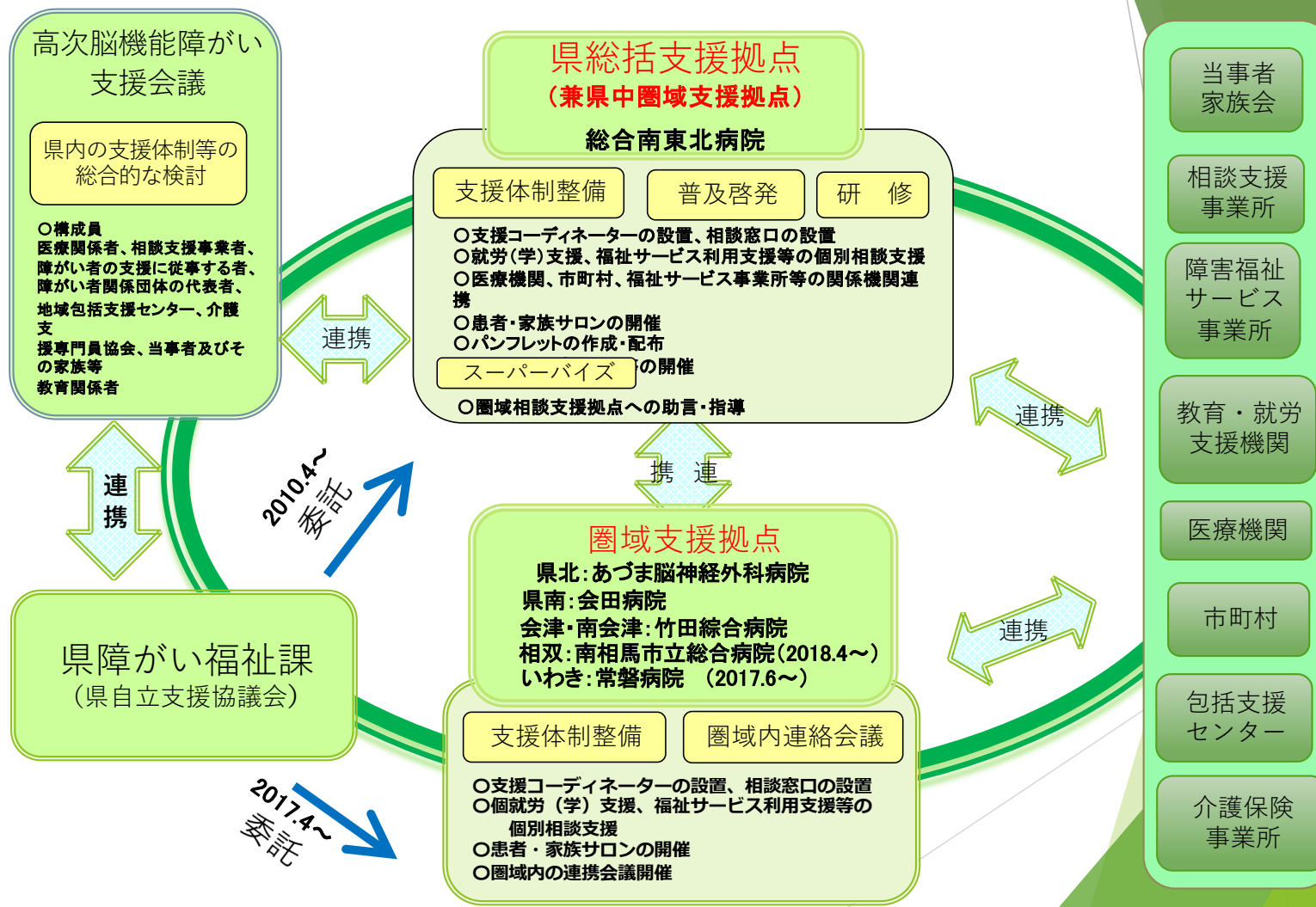
年度	2010～2013年度	2014～2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
めざす姿	【県内普及啓発期】 診断から支援	【支援体制構築期】 支援ネットワーク	【地域支援体制基盤構築期】 全圏域に支援拠点開設	【定着期】 地域の支援体制の充実			
支援機関	相談体制	医療機関1カ所に委託		県総括：支援コーディネーター支援・スーパーバイズ			
				医療機関5カ所に委託、全6圏域に支援拠点開設			
	関係者支援	圏域別研修会・症例検討会、医師向け研修会		福島県高次脳機能障がい支援会議発足			
家族会				圏域別研修会・連絡会議、事例検討、介護支援専門員への研修			
	家族会	患者・家族サロン協力 身近な地域でのサロン開催希望		全圏域での患者・家族サロンに協力 圏域別研修会・連絡会議に協力（体験発表、事例検討参加）			
県民	普及	講演会・シンポジウム開催					
				社会資源マップ1版作成・配布 チラシ作成・配布			
				改訂2版作成・配布 テレビ・ラジオ広報			

福島県高次脳機能障がい圏域支援拠点



	福島県内の各拠点	コーディネーターの配置	サロン開催頻度
① 県中	県総括及び県中支援拠点 総合南東北病院	社会福祉士 言語聴覚士	毎月第二土曜
② 県北	あづま脳神経外科病院	言語聴覚士 社会福祉士	偶数月第三土曜
③ 県南	会田病院	社会福祉士	偶数月第一土曜
④ 会津	竹田総合病院	社会福祉士	奇数月第三土曜
⑤ 相双	南相馬市立総合病院	社会福祉士	偶数月第三水曜
⑥ いわき	常磐病院	社会福祉士	奇数月第二土曜

福島県高次脳機能障がい支援体制



〈家族会参加型の圏域別研修会・連絡会議〉

南相馬市



郡山市



福島市



いわき市



発症から生活再開までの道程

生活再開

回復期
急性期

入院前



先が見えにくい壁のよう

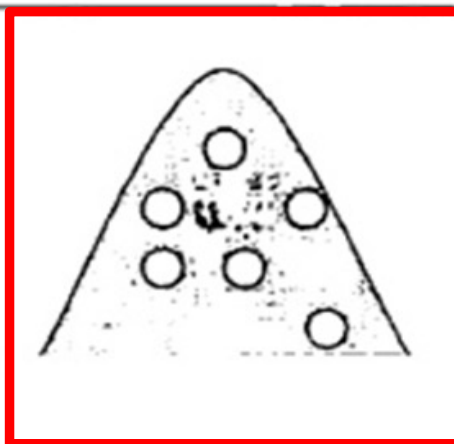
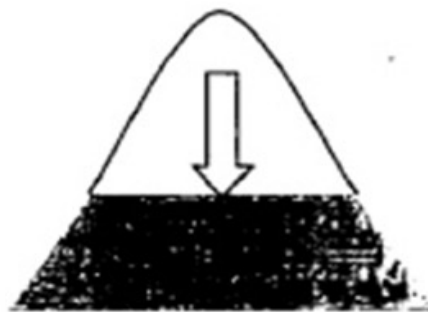
わからない見通し... 不安...

高次脳機能障がい?

発症

高次脳機能障がいの方に起こる状態

1. 障害を理解するために



- ①学習や経験により一つの山を築いてきた。
- ②山のある高さまで低くなってしまったというのであれば、またそこから頑張って築き上げていこうと思う。
- ③しかし、障害により、山のところどころに穴があいてしまったため、どのようにしてまた山を築いていったらよいか困っている。

国立リハビリテーションセンター
高次脳機能障害者に対する支援プログラム
～利用者支援、事業主支援の視点から～より

支援者が目指している支援と乖離しやすい点

◎本人、家族が、自分たちの症状を理解しながら、その方たちらしい生活を、安全・安心におくれるように支援する

<理想の支援>

○安全・安心な生活イメージの共有

○様々な選択肢の提示

○本人、家族の自己決定を尊重

○医療チーム・地域関係者チームで支援する

<現実>

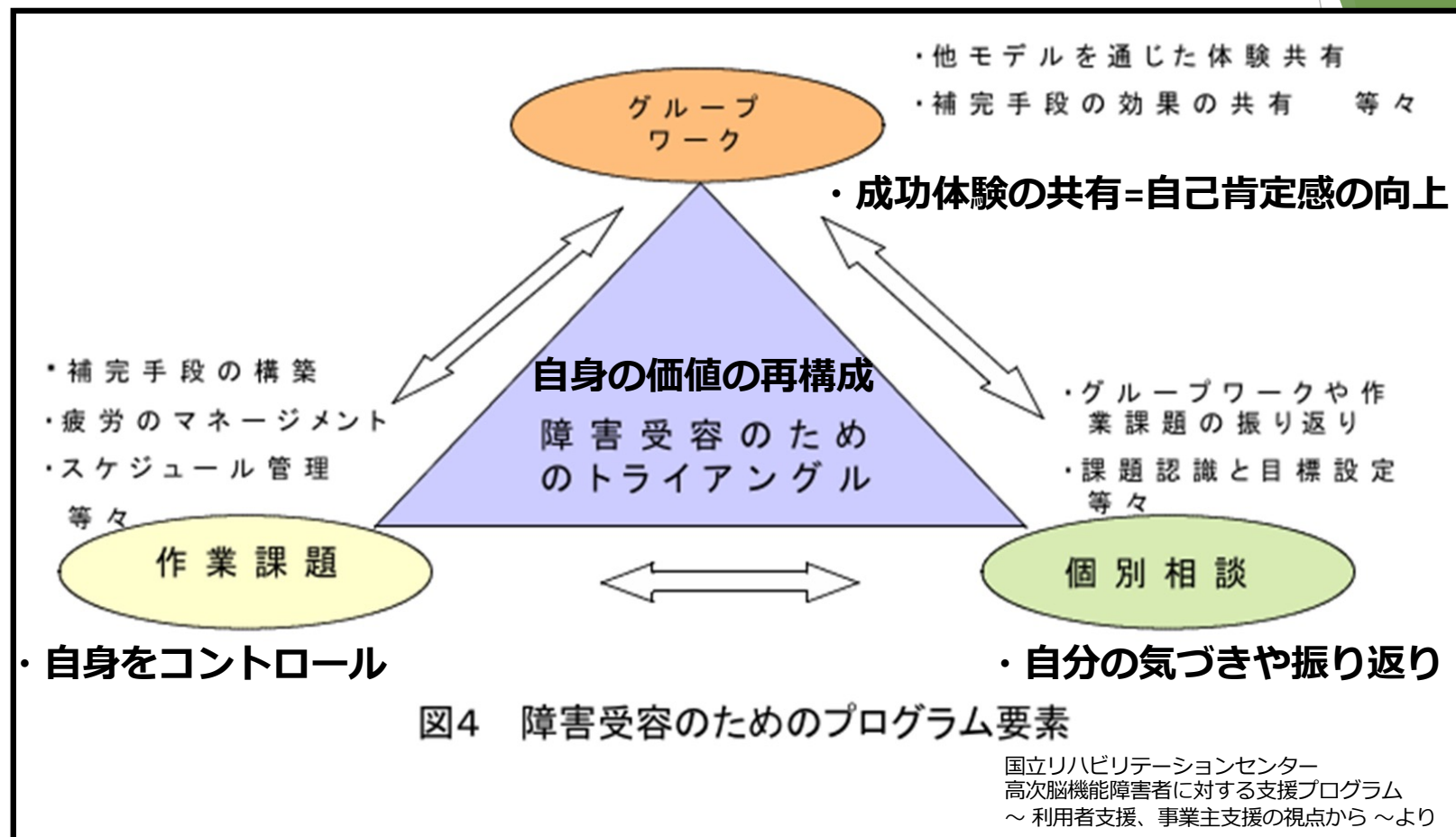
○本人の状態認識が進まず同じ視点でイメージが図りにくい

○限られたリハビリ期間や社会資源の限界から限られた選択肢になりやすい

○上記の経過から自己決定をせざるを得ない

○連携する難しさ。基本ベースの理解やみている視点に違いがある

障がい受容のためのトライアングル



様々な支援者と社会資源

急性期(治療)→回復期(リハビリ)→生活期（再開）

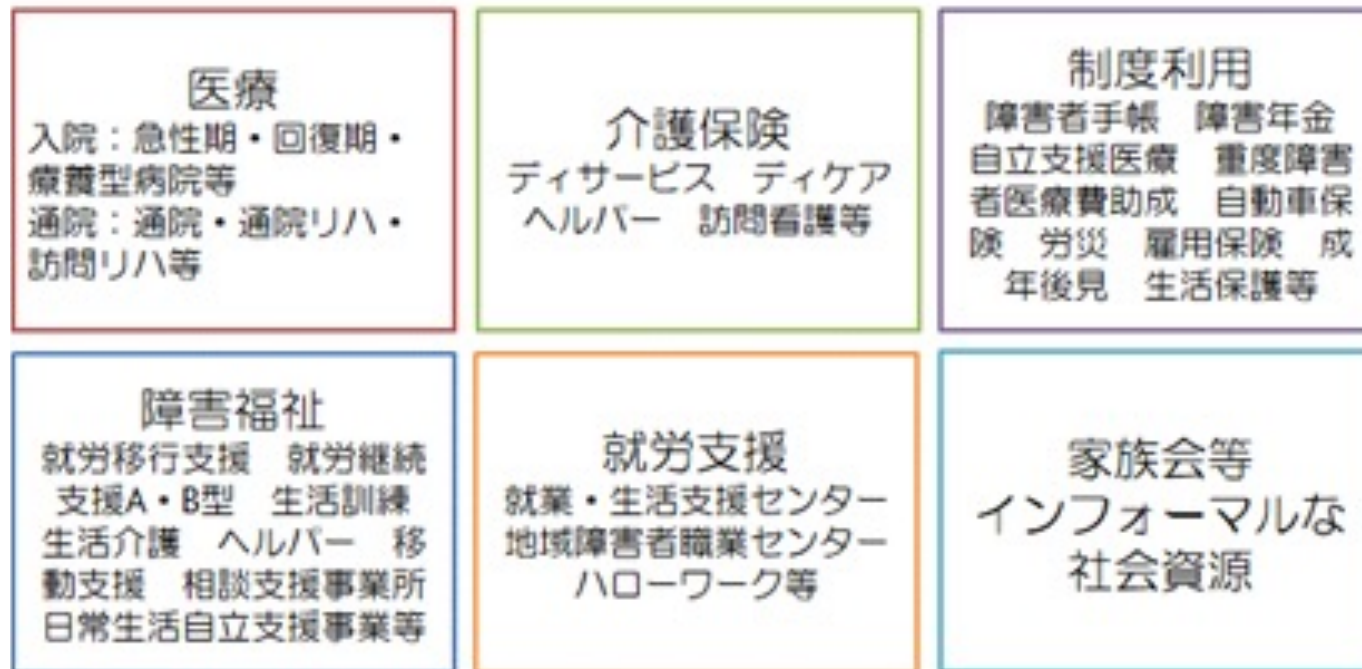


図3-5 利用できる制度や社会資源利用を考える

どなたがどんな支援をするか寄り添い、模索し続ける

国立リハビリテーションセンター
高次脳機能障害者に対する支援プログラム
～利用者支援、事業主支援の視点から～より

高次脳機能障がい者支援の節目

- ①入院し医療機関での治療・リハビリを受ける場面
- ②医療機関での治療・リハビリを終え、サービスを利用する場面
- ③サービスの利用後、支援上の課題が生じて支援内容の見直しが必要な場面
- ④医療や福祉・教育との関係が途切れてしまい、ケースの課題やニーズの掘り起こしが必要な場面

節目の中で支援できること

①②医療機関での治療・リハビリの場面とそれが終了する場面

→診断やその可能性の説明、相談窓口・サービス制度の情報提供（リーフレット・手引き等のお渡し）、患者の退院後の生活準備・それに関わる連携、短期、中長期的見通しの共有

③サービスの利用後、支援上の課題が生じて支援内容の見直しが必要な場面

→本人状態に合わせた関係機関の間で密に連携をとる。医療保険・介護保険・障害福祉等の様々なサービスの選択肢の中から、当事者にとって最適な組合せや適切な手段などの検討・模索する。
利用の準備・調整・つなぎ及びフォローアップを行う。

④医療や福祉・教育との関係が途切れてしまい、ケースの課題やニーズの掘り起こしが必要な場面

→様々相談機関は、高次脳機能障害の診断を受けていないものの、高次脳機能障がいと疑われる相談者に対しては、支援拠点機関等が作成したパンフレットやリーフレットなどを渡し、受診や適切な利用サービスなどへつなげるきっかけを作る。

高次脳機能障がい支援体制加算 ～高次脳機能障がい支援養成研修～

<目的>

障がい福祉サービス事業者が高次脳機能障がい者を支援するための体制を整えることを評価し、事業者の報酬に加算されるもの。
これにより、事業者は質の高い支援を提供しやすくなり、障がい者が地域社会でより自立した生活を送るための支援を強化することを期待されている。

<対象範囲>

生活介護、施設入所支援、共同生活援助、自立訓練（機能訓練・生活訓練）、就労移行支援、就労定着支援、就労継続支援など、幅広い障がい福祉サービス事業所で適応

<算定要件>

高次脳機能障がい支援養成研修の受講＋一定条件＝加算

報酬単価は41単位/日

41単位 × 当月の延べ利用数 × 地域区分（10円）

福島県 R7年度実施予定

第1回：講義R6.10/20～11.3 演習11/26

第2回：講義R6.12.22～R7.1.4 演習1/4

（例）

高次脳機能障害支援養成研修カリキュラム	
<実践研修>	◆対象：サービス管理責任者、相談支援専門員などの高次脳機能障害者支援の経験者等
	◆研修のねらい： ・多職種連携（チームアプローチ）の重要性を理解する。 ・高次脳機能障害者の支援の短期的な方向性（個別支援計画等）を立てることができるようになる。

	時間	科目	内容
I 講義	400		
障害特性に応じた支援・地域の支援体制	40		地域における高次脳機能障害の支援体制
認知症との共通点と相違点	40	障害特性に応じた支援	認知症との共通点と相違点
発達障害との共通点と相違点	40		発達障害との共通点と相違点
小児期における支援	40	ライフステージに応じた支援	小児期発症の高次脳機能障害の特徴／復学支援
長期経過とフォローアップ	40		各ライフステージにおける高次脳機能障害の特徴／支援
多職種連携・地域連携：チームアプローチの重要性	40	チームアプローチの重要性と支援の原則	地域連携とチームアプローチ
多職種連携・地域連携：家族（きょうだい）支援・当事者家族会の活動	40	家族（きょうだい）支援・当事者家族会の活動	高次脳機能障害者家族支援
コミュニケーション支援	40	コミュニケーション支援（地域生活・職場での支援）	失語症・高次脳機能障害によるコミュニケーション障害の理解
支援の実践的な枠組みと記録	40	支援の実践的な枠組み・プロセス／アセスメントと支援の手順書の理解／記録方法	支援の実践的な枠組み・プロセス／アセスメントと支援の手順書の理解／記録方法
自動車運転再開支援	40	自動車運転再開支援評価・手続き	高次脳機能障害者の自動車運転再開支援に関する法制度、運転評価、課題や留意事項などの理解
II 演習	360		
障害特性の理解と対応方法	180	1. 障害特性の理解と対応方法 2. 障害特性とアセスメント	高次脳機能障害者の心理と対応法の理解 障害特性に基づくアセスメント グループワーク（障害特性の把握と対応方法のディスカッション） 対応方法演習（ロールプレイ） グループワーク及び発表（対応方法の振り返りと支援計画検討） 強みや好みを活かす視点 環境調整の考え方 環境調整の方法 行動の記録の方法 記録の整理と分析 再アセスメントと手順書の修正 チームアプローチを学ぶ（個別支援計画作成演習） グループ検討／まとめ
環境調整による支援と記録に基づく支援の評価	180	1. 環境調整の考え方と方法 2. 記録の収集と分析	

〈サロン参加者の感想と効果〉

〈ご本人〉

「分かり合える仲間がいる。自分だけがつらい訳ではない。踏み出してみようと思った」

「今の現状を言語化し、相手に伝えることの練習となった」

「自分は一番ダメなような気がしていたが、悩みを打ち明けられてよかった」

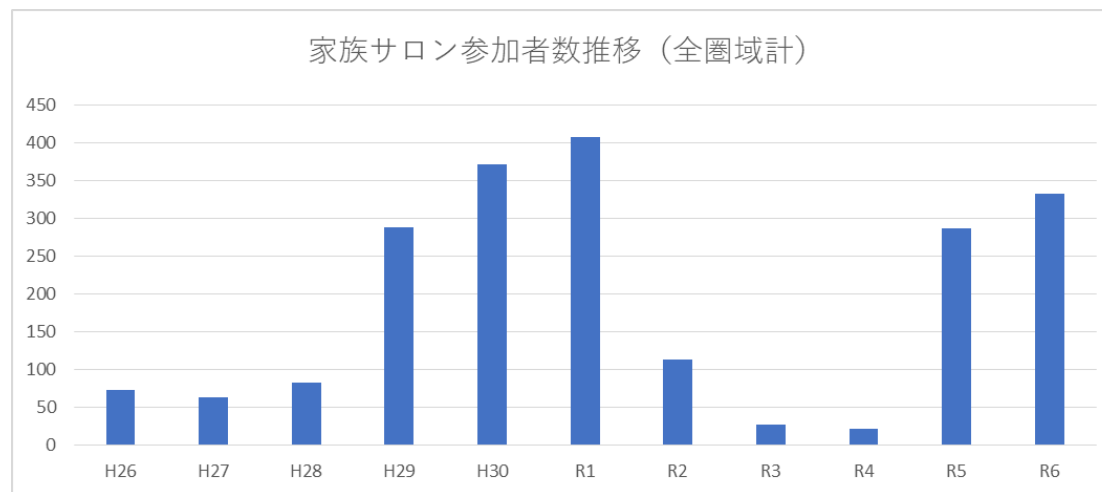
〈ご家族〉

「他の方の話を聞いて、よりよい対処法があり、もっとできることがあると思い、希望がもてた」

「自分だけでとても苦しかったのですが、しっかり受け止めることができそうです」

**本人・家族の「生活復帰・社会復帰したい」という
気持ちを支え、サポートし合う場**

サロンの参加推移とご紹介経路



＜サロン紹介経路＞

R6年度 全圏域 新規者合計 36名



〈地域で支えていくために〉

- ◎ 高次脳機能障害をもっている方が、よりよい支援を受けられるための働きかけ・共に学びあえる機会の提供→研修・普及活動
- ◎ わかってくれる方がいる・・・ありのままの思いを話せる場所=サロン
 - ・ 受容段階やその方の状況によりピアの力が必要となる
 - ・ コーディネーターを含む地域の各支援機関、当事者同士が共に学び合え、支援力の向上へつながることを目指す。

<高次脳機能障害支援向上のポイント>

- ☑ 高次脳機能障害支援養成研修の受講
- ☑ サロンの活用
- ☑ 多機関連携